

素足

鏡に映る僕の脚は
どこに立っているのか

明るすぎる部屋
そして廉価なカメラで写したような
存在の重量が気化してしまった世界

明日のこと
明後日のこと

涙は溢れるものだ
抱かれるという感覚に満たされた、その時に

同じ肌でありながら
まるで感触の違うその肌に触れ
僕は覚醒してゆく

何に向けて手を伸ばそうとしているのか
そんなことなどわからないが
求められていることを僕は知った

鏡は僕の脚を映している
確かに立っている脚を映している

(2001.9.15)